

[17] バレエと昼食

英国ロイヤル・バレエ 来日公演

1992年5月29日 東京新聞 夕刊

今（一九九二年）からほぼ三十年も前のことになるが、イギリスのロイヤル・バレエ団が初来日したとき、私は一日中その舞台稽古を見ていたことがあった。その頃の日本のバレエは今のようレベルが高くなかったし、外来公演もほとんどなかったから、たとえ舞台稽古でも一日見ている飽きなかった。いや、飽きないどころの話ではない、へたをすれば絶望のあまり再起不能になりかねないほどのものだった。

● 高い壁

しかしその日一番つよい印象を受けたのは、舞台の上のことではない。妙な話だけれども、昼食のときだった。

午前中から続いていたゲネプロ（舞台稽古）が昼休みになって、暗い客席に散らばって見ていた私たちは、劇場の前の小さなレストランに行った。そこへ、しばらくしてロイヤル・バレエ団のメンバーが三三五五、連れ立ってやってきたのだ。ゲネプロの最中だというのに、彼らは先程までの稽古着姿とうって変わり、髪をきれいにふくらませてイヤリングをつけ、きちんとドレス・アップしている。そして、なんとも堂々たるエレガントなようすで、しっかりとフルコースの食事をしていったのだった。

ああ、これじゃかなわないなど、私はつくづく思ったものである。うまく言いあらわすことができないのだけれども、そのときのことを思い出すと、今でもため息と涙のいりまじったようなものがこみあ

[17] バレエと昼食

英国ロイヤル・バレエ 来日公演

1992年5月29日 東京新聞 夕刊

げてくる。テクニク以前に、あるいはテクニクとともに、越えなければならぬ高い壁があった。それから十年くらいして、日本のバレエ団が初めて念願のヨーロッパ公演を果たしたとき、フランスの新聞に「日本のバレリーナたちは、昼食はサンドイッチだけで奮闘する」という、あきれているのか感心しているのか分からない見出しの記事が載って、ちょうどパリに留学中だった私は、ロイヤル・バレエ団の初来日のことの思い合わせて複雑な思いだった。

日本のバレリーナが空腹を抱えて踊っていたというわけでは、もちろんない。ことは単に国による食習慣の違いというだけのことかもしれないのだが、しかし、何かそこには、その頃の日本とヨーロッパを隔てていた心理的な距離とでもいったものがあつた。そうしたさまざまことを思うと、日本も、日本のバレエも、たかだか二、三十年の間はずいぶん遙かな道のりを歩いたものだと思うのである。

● 精神の構え

別段、昼食風景に感動したから言うわけではないけれども、イギリスのロイヤル・バレエというのは、技術的には世界で一、二を争つバレエ団だと、私はずっと考えてきた。バレエ団そのものは創立六十年ということだから、三百年の歴史を持つパリ・オペラ座バレエとか、十九世紀に花開いたロシア・バレエやデンマーク王立バレエに比べれば新しいのだが、

[17] バレエと昼食

英国ロイヤル・バレエ 来日公演

1992年5月29日 東京新聞 夕刊

その安定した動きと、重厚で気品のある舞踊空間の質は、どこにも引けをとらない。なにかしら精神の構えがちがうといった気にさせられるのである。もちろんパリ・オペラ座の洗練された輝きや、全盛期ロシア・バレエの奥の深い神秘性と比較してどちらが上かというような問題ではない。それは質の違い、好みの問題としか言いようはないのだが。

フランスのアンリ・トマが一九五一年に書いた『世捨て人』という小説のなかで、「コヴェント・ガーデンのバレエ」つまりロイヤル・バレエについて語るところがある。主人公の演劇レポーターが「ぼくにはバレエの振付の良し慈しなんて分からないけど、でもあんなものはシャンゼリゼのバレエの足元にもおよびませんよ」と言って、同じフランス人の相手の男に「あなたは思い違いをしていらっしやる」と反論されるのだが、トマという作家はバレエが分かる人だなど思っていて、私は読んでいて感心した。イギリスのものというけどでもクソミンにけなすのがフランス人の癖だけれども、ことロイヤル・バレエに関するかぎり、フランスのバレエとまた別の確固たるものを持っていることは確かである。

●黄金の果実

今回は五年ぶりの来日だが、パリ・オペラ座の話題のエトウル、シルヴィ・ギエムやポリシヨイ・バレエのトップだったイレク・ムハメドフを迎えて、一層レベルが上っている。よその国の宝をどんどん

〔17〕バレエと昼食

英国ロイヤル・バレエ 来日公演

1992年5月29日 東京新聞 夕刊

取り込んでいくところは、さすが大英博物館を持つ
お国柄、などと言ったら失礼だろうか。

・初日の『ラ・バヤデール』は思ったとおりの安定
した舞台で、満足した。主役のヴィヴィアナ・デュ
ランテも胸がすくようにきれいに踵が前に出て、実
にしなやかで叙情的だし、気のせいか前よりノーブ
ルで知的になったムハメドフも良かった。

が何といっても素晴らしかったのは第三幕の幕開
きでブロンズ像のソロを踊った熊川哲也。拍手が多
かったのは、決して同国人の身びいきだけのことで
はない。三十年越しの黄金の果実が今ここに輝いて
いる、そう私は思った。

(追記。英国ロイヤル・バレエ団の初来日から
二年後、一九六三年にパリ・オペラ座の初(？)
来日があったが、これが良くも悪くも実にフ
ランス的で、コール・ド・バレエは個人まち
まちに不揃いだったが、それがじつにチャー
ミングだった。

世界屈指の大バレエ団でも時代によって、
芸術監督によって、またその時の編成によっ
て、舞台のレベルは大きく変わるものだ。)